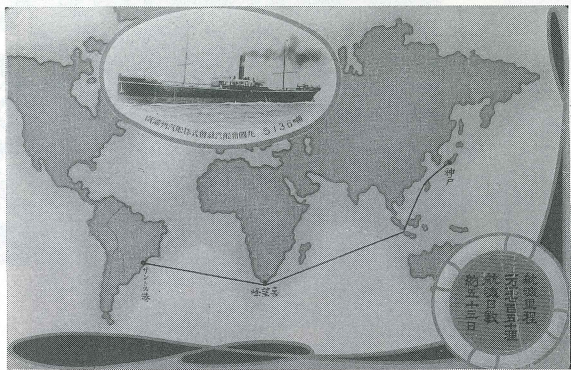


金子片水翁の遺句

亥の春や老の一てつ山を貫く
君ケ代や長江万里初霞
天下取る狸おやぢの昼寝哉
解金の春や草木も黄金色
巳の春や四百余洲をひと呑に
年忘れ貧乏迄も忘るゝな



南浦州汽船株式会社汽船帝国丸(5,136トン)
神戸—喜望峰—サントス港の航海里程11,750哩
航海日数約53日

かき初めや辰巳屋の春はことしから
命懸の喧嘩仕様ぞ成の春
亥の春は蓬萊山のふもと哉
大天狗鼻高々年暮れぬ
福の神居処もなし年のくれ
ソンドラや神世乍ら草の色
むつくりと黄の色うれし福寿草
大空に杵の音あり卯月哉
電信の棒かくれ行ツバメ哉
この世からあの世に続く霞哉
初鴉黒きは物の始めなり
花雪は散るにまかせて昼寝哉
御雑煮も外米だぞ戦勝の春
夕立の来そで来ない暑さかな
さみだれや笠かたぶけて世田の橋
年暮れぬスパルタ楯の其影に
飯蛸の真珠にならぬ恨かな
初霞二重橋から高殿へ
人絹や錦繡の糸きくと桐
書き初や継の宮様御二つ

湯の中のひげ切り丸や初から須
御神楽や鳩の番も神々し
聖代の民とて春を有馬にて
我影を追うも三六五回としのくれ
お雑煮に金の味知る入歯哉
初詣今年社は仁王尊
行く春を浪打ち際できようなら
年暮れぬ鯨にもりをなげつけて
借金かまの山飛び越えし牛の春
塞翁に肖り中午の春
今日からは黒字斗りそうしの春
はなたれや同行三人初時雨
莫斯向もすこうは吹雪なるらん薄紅葉
食うて寝て牛にならばやお正月
大木の松の日出や春の色
雪富士や二六一の御代の色
留守番はおれがするなり松の内
花作り花見の時はなかりけり
正朝や清算したる貌とかほ
花散つて後の青葉ぞ快き
金屏に影写そうぞ衣更
今日ばかり蟻踏まぬよふ歩くべし
天正の矢叫びを聞けほとゝぎす
背陣の陣屋をかこむ桜かな

金子直吉翁の片鱗

隅田 栄

高知県吾川郡名野川村に幕末の頃、落魄の士分の家に生れた金子翁は、運命の偶然と言うのか高知市上街通り町の製紙原料と砂糖商、質店等を営んでいた傍士商店に丁稚奉公として入店をされた。その頃近來稀に見る青年をこよなく愛撫したのは嘉永四年生れの岩本善助翁であった。傍士の当主久万次氏は生涯を通じてチョン髷げで通したほどの名物男でもあった。

砂糖等の商品は古くから鈴木商店とも取引があり柳田富士松翁も度々全店を訪れていて、その頃からの交遊もあつたようである。而して神戸港開化に興味を覚えていたが明治十九年金子翁は岩本善助翁の助言もよろしく青雲を志して鈴木商店に落付いた。

岩本翁の忠言は時にわが兄に言うごとく孜孜と述べられ、初代鈴木岩治郎氏の急歿に際しては一層励ましのことばを述べられた。愈々お前の桧舞台が待っているぞ鈴木よね刀自の膝下に柳田翁を助け鈴木の天下を実現することを誓ってくれと熱弁の花向けを与えたことであつた。秋空に一群の先頭にたつ雁をまぼろしに画き乍ら金子翁を見守つた岩本翁は守護神に優る大恩人と言えるであ

ろう。大正二年高知県中土佐町に余生を送っていた恩人岩本翁が突然上顎癌がんの為に倒れて大阪の病院に臥床の身となつたことがあつた。

金子翁はいち早く見舞われ当時問題のラジウムを三菱岩崎小弥太男爵から手に入れられた。当時この未知の療法は余り知られなかつただけに世間の評判を博した。その借料たるや一日拾圓を嚙された。私の十五才の時大阪支店の給料二円五十錢であつただけにその価格御想像願ひ度、この金子翁のかくれた美拳たるや何時迄も恩顧の誠を後世に伝えたいと思うものである。

翻つて昭和二年四月二日鈴木商店破綻後当時多大の苦慮を重ねられたと思うが社運は亡ぶことなく現存されていることが尊い。今在世されていたら如何なる産業国策をひねられたであろう。ボルネオ、スマトラの夢を見ながら永眠されたとは言え澆刺はらうと魂は燃えつづけていることを確信するものである。この金子翁と報恩のラジウムのことは余り知られていないので誌上を借りたことを謝す。